

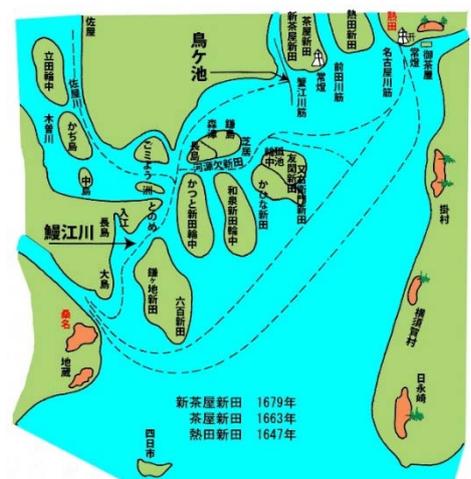
名古屋の街道

(1) 街道と宿場

街道という昔の（歴史的な）道というイメージがありますが、この字が使われたのは幕末近くになってからのようで、それ以前は「海道」と書くことが多かったそうです。道はもともと音としての「みち」で、この「ち」はあっち、こっちの「ち」で漠然とある方向を指し、「み」は事柄を美しく言うための音という考えがあります。また、「辵+首=道」という字形から古代中国の「敵の首を手を持って行く」からというおそろしい説もあります。

街道は東海道をはじめとする国道にあたる五街道が有名です。街道には一里塚や道標が置かれました。また、街道の途中に数キロ～十数キロ間隔で宿場が設けられました。宿場という東海道 53 次（江戸－京都間）が有名です。近年では京街道（山科の追分で東海道と分かれ、大阪高麗橋に向かう）の 4 宿を加えた東海道 57 次もよく使われます。東海道には愛知県内では、33 番目の二川宿（豊橋市）から順に、吉田宿（豊橋市）、御油宿（豊川市）、赤阪宿（豊川市）、藤川宿（岡崎市）、岡崎宿（岡崎市）、池鯉鮒宿（知立市）、鳴海宿（名古屋市）、そして 41 番目の宮宿（名古屋市）の 9 宿があります。名古屋は宿場町ではなく、参勤交代の諸大名は名古屋を通過させ、一般の旅人は玉屋町（名古屋市中区丸の内、本町の南）の旅籠（あいのしゆく）を利用しました。有松も間宿（宿泊は禁止）で宿場ではありません。

さて、街道を通る上での大きなネックに、大きな川や海を渡ることがあります。その一つに東海道の宮宿（熱田宿）から桑名宿へ渡る七里の渡しがあります（図 1・図 2）。七里（約 28 km）を船で揺られながら渡るのに、6 時間余りを要したといわれます。満潮時と干潮時ではコースが異なり干潮時には、航路が約 10 里（39 km）にもなったようです（図 3）。天候、船酔い、トイレ、防犯上など多くの問題を抱えており、陸路を佐屋まで行き、三里の渡しを利用する機会が増えたようです。



熱田から桑名迄 海上絵図（『七里の渡し』考）に加筆、鶴舞図書館所蔵

図 1 桑名宿の常夜灯 図 2 宮宿の常夜灯 図 3 七里の渡し航路→
(木曾川文化研究会, 2004)

(2) 一里塚と道標

一里塚は、江戸の日本橋を起点として、1 里（約 3.927 キロメートル）毎に設置された塚（土盛り）

です。一里塚の大きさは5間(約9m)四方、高さ1丈(約1.7m)に土を盛り上げてつくられ、一里塚の上には多くはエノキやマツの木が植えられました。樹木は築いた塚の崩壊を根で防ぐ役割もありました。一里塚は本来、街道の両側



図4(上) 笠寺一里塚

で設置されるのですが、現存する一里塚は道の片側のみ残したものが多

図5(右上) 祐福寺一里塚

図6(右下) 有松一里塚



が多いようです。**笠寺一里塚**(図4:図11のK)は名古屋市内に残存す

る唯一のもので、エノキが植えられています。かつては、一対の塚で、他の一基はムクノキが植わり、大正時代まで残っていたそうです。**祐福寺一里塚**(愛知郡東郷町)では道の両側に対になった一里塚が見られます(図5:北側の塚)。県道56号線の南側の塚の周囲には、塚の崩壊防止の石積みがなされています。**有松一里塚**は祇園寺の西に大正時代まで一里塚の築山が残っていたそうですが、2012年に元の位置に近いところに復元されました(図6:図11のA)。

道標も街道の起点や分岐点に残っています(図7・図8)。いつ建てられたものか不明なものも多く近年、再建されたものもあります。

(3) 名古屋市主な街道

街道の名前は目的地を示すものが多いですが、同じ街道でも逆向きに行く場合は別の名前になることがあります。街道名は江戸時代に使われたもの



図7 佐屋街道の分岐点(図11のS) 図8 善光寺街道の分岐点(図11のZ)

が有名ですが、現在の地図では不明な部分が多くあります。図11はgoogle mapに示されたものを基本として表してありますが、文献によって異なる部分もあります。図9は江戸時代の名古屋の城下町の地図で、少し傾いた逆二等辺三角形のような形をしています。城下町の道はわざと複雑にし

てあるところも多いのですが、名古屋は碁盤の目状にきれいな街並です。ほぼ平坦な熱田台地につくられた街であったことも一つの要因だったと思います。本町通と伝馬町通が交わる交差点（図11のFT）は、札の辻と呼ばれいくつかの街道の出発点になっています。

次に、代表的ないくつかの街道を紹介します。

◎**東海道**：東海道は名古屋の城下町を通りませんが、宮宿（熱田宿）から七里の渡しで伊勢湾を渡り桑名宿へ向かうのが大きな特徴です。江戸－京間は約490kmで、山の中を通る中山道よりも約40kmほど短いのですが、大きな河川が何本もあり、中山道を通る大名・旅人も多かったようです。

◎**美濃路（美濃街道）**：宮宿（熱田）と中山道の垂井宿を結ぶ脇街道で、名古屋城下を経由する重要な街道です。全長14里24丁（約58km）で、多くの大名が通り、朝鮮通信使、琉球使節（1714年以降）なども通りました。美濃路の起点は熱田神宮の正門（南門）から国道一号線を渡ったすぐ南の地点で、東海道（宮宿方面）と分岐しています。

◎**上街道**：名古屋城の東大手門から犬山を経て中山道の伏見宿に至る、尾張藩の参勤交代に使われたルートです。犬山の楽田までは、稲置街道と重複し木曾街道とも呼ばれました。

◎**下街道**：中山道と名古屋城下を結ぶ脇往還で、名古屋と尾北や美濃・信濃を結ぶ重要な街道でした。「上街道」に対して、庶民が使う非公式の街道だったことから下街道と呼びます。長野の善光寺へ参拝する人の通行も多かったことから「善光寺街道」とも呼ばれます。

◎**駿河街道/岡崎街道/飯田街道**：名古屋（名古屋宿）から飯田方面へ向かう道です。江戸時代には公的には岡崎街道で、一般では、「駿河街道」と呼ばれました。駿河街道は、札の辻より、昭和区川名、天白区平針を経て岡崎市宇頭で東海道と交わります。1885年に道路法で名古屋～天白村（平針）の区間が「飯田街道」とよばれ、1920年からは平針村からは「岡崎街道」とも呼ばれます。

◎**塩付街道**：江戸時代の中頃まで、南区本星崎町一帯では、さかんに塩を作っており、そこでとれた塩は、千種区古出来町あたりに集荷され、遠く信州まで、俵に詰め運ばれたといわれています。

◎**佐屋街道（佐屋路）**：七里の渡しを避けて、宮宿から、万場宿、佐屋宿への陸路（6里）を経て、佐屋から桑名宿への水路（3里：三里の渡しと呼ばれます）によって結んでいた街道です。東海道の迂回路です。

佐屋路は、1634年の将軍家光の上洛の時に、尾張藩藩主の徳川義直が開いた道といわれています。幕末の将軍徳川家茂、一橋慶喜、明治天皇も利用しています。1872年には前ヶ須街道（干拓された新田を通して弥富の前ヶ須から熱田に続く近道）が新東海道に定められて佐屋路



図9 名古屋の城下町
(名古屋市博(編),2007)



図10 佐屋宿 (URL1)

はその歴史を終えます。1934年に、東海道は現在の国道1号のルートに切り替ります。
 図11は現在のほとんどの道を網羅した縮尺のもの（地理院地図）に街道を記入したものです。拡大していただくと細かいところが見つかると思います。点線部分はわからなかったところです。

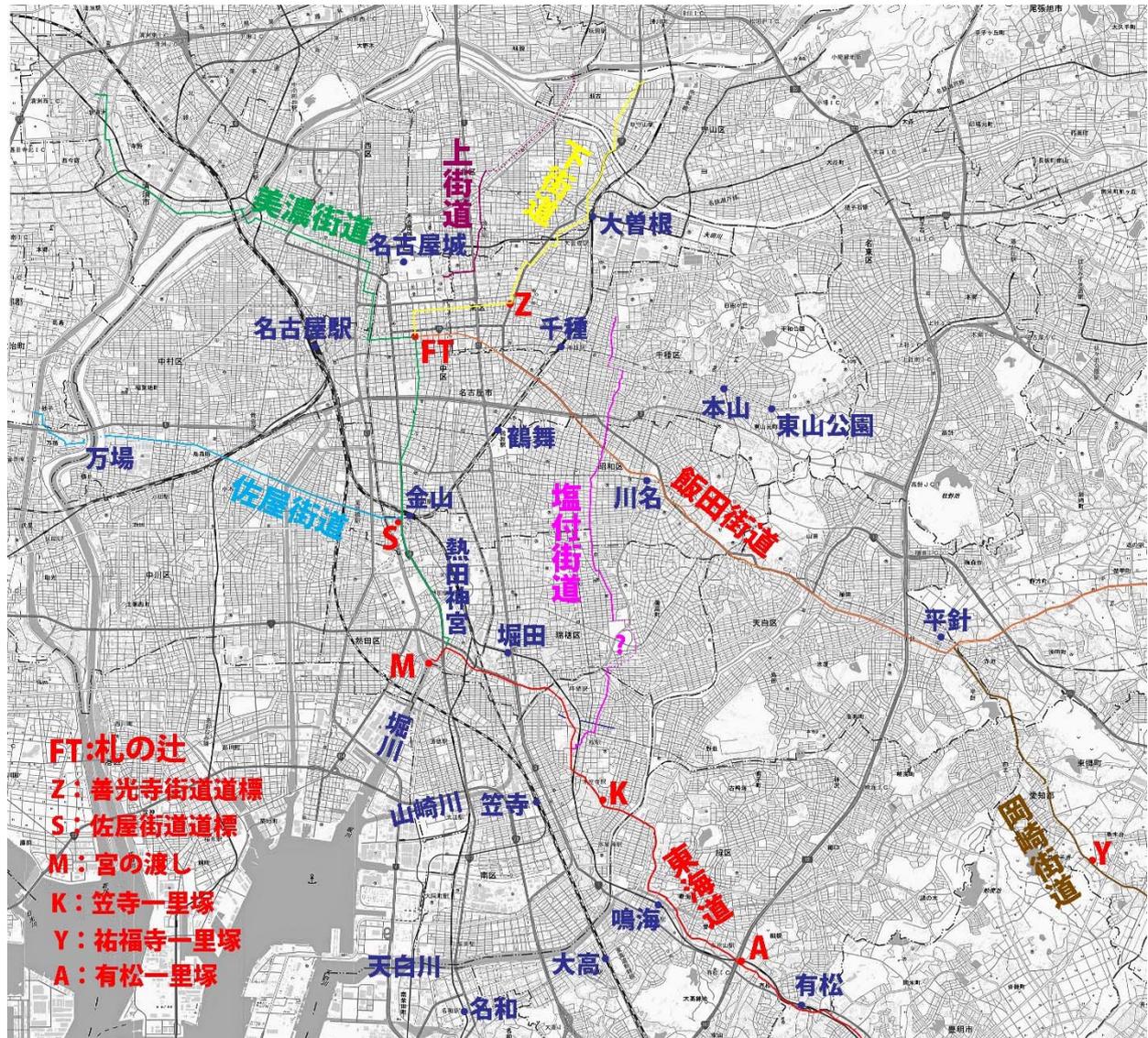


図11 名古屋の主な街道（地形図は地理院地図）

主な参考引用文献

- 木曾川文化研究会，2004，木曾川は語る－川と人の関係史．風媒社，274p．
- 国土技術政策総合研究所，2002，国土技術政策総合研究所資料．国土技術政策総合研究所．
- 名古屋市博物館（編），2007，大にぎわい城下町名古屋．特別展「大にぎわい城下町名古屋」実行委．
- 新修名古屋市史第三専門部会，1998，江戸期なごやアトラス．名古屋市総務局
- 前田栄作・水野鋺造，2007，尾張名所図会絵解き散歩．風媒社，182p．

URL1：<https://note.com/klubnika/n/n6a41015b00f5>